

読書紹介バザールの構想

「読書紹介バザール」のねらい

読書紹介バザールの学習を行うことで、どんなことをねらうのか、以下に列举します。

- 自分の考えや気持ちを相手に理解してもらえるように話したり、話し手の意図を考えながら話の内容を聞き取ったりする。
- 自分の考えや気持ちを的確に話すためにふさわしい話題を選び出す。
- すべての生徒にとって、「話すこと・聞くこと」の学習活動ができるような場を設定する。
- 自分が読んで選んだ好きな本について説明させることで、学習する生徒の興味や意欲を高める。
- 一人一人の生徒に学習した結果の達成感や成就感を味わわせる。
- 主体的かつ意欲的に読書に親しませる。
- 様々な本を読んで、人間・社会・自然などについて考え、自分の意見をもたせる。
- 目的をもって文章を読み、必要な情報を集め、自分の表現に役立たせる。
- 自らの読書生活の向上を意識化させる。
- 自分が紹介した本を、聞き手が読みたくなるような説明の仕方で紹介できるようにする。
- 話し手が伝えたいことを的確に聞き取ることができるようにする。
- 級友が紹介した本の中から選び、進んで読むことができるようにする。

「朝の読書」とのタイアップ

読書紹介バザールを行った学校の1年生では、4月から朝の時間に、毎日15分間ずつの読書の時間を位置付けていました。毎朝、15分間、自分で選んだ本を黙々と読む時間です。当初はそれほどではありませんでしたが、日を迫うごとに熱心に読書に浸る姿が見られるようになっていきました。終了時刻になっても、すぐには本から目を離さない生徒も出てきました。

また、休み時間や昼休みには読書をする姿が見られるのが当たり前の光景となりました。こうして読書習慣が自然と定着していきました。

読み終わった本は、「読書記録カード」に記入するようにしてあり、そこには友人への「おすすめ度」と「一言感想」を書くようにしてありました。おすすめ度は、ABCの3段階で、「友達にぜひ読んでほしい」ならばA、「普通」ならばB、「あまりおすすめしない」ならばCとしました。

紹介したい本の選出

「朝の読書」の結果を記入してある「読書記録カード」のリストの中から、まず「友達に紹介したい本ベスト3」を選びました。その時点で、おすすめ度Aの複数の候補の中から選ぶために迷うことはあっても、全くあてもなく困り果てる生徒はいませんでした。

その後は、それぞれの生徒の判断で1冊に絞り込んでいきました。この時点で、この本のどこをどのように紹介するのか、その構想はおおよそできていたようです。それだけ、自分が読んだこの本を、まだ読んでいない人に紹介したいという思いが強いということです。